

ぐるぐる東京

山手線を歩く

51

石野 伸子

# 武士の町から宝石の町へ

## 御徒町



御徒町が日本一のジュエリータウンだということをご存じだろうか。

JR上野駅から御徒町駅まで南北400mにわたって続くアメ横。そのカオスのような熱気が終わった駅前商店街を一步入ると、そこには不思議な静寂が広がっている。狭い路地何本にもわたりズラリと並ぶ宝石店の看板。宝石といっても地味な事務所風の店構えが多い。ここは卸問屋街。加工業者なども含めるとざっと2000社が軒を並べている。

□

なぜ、御徒町が宝石の町なのか。その歴史は江戸時代にさかのぼる。

「御徒町」という下級武士の粗屋敷があり、御徒町と呼ばれるようになったが、周辺には多くの職人も住んでいた。日本橋と浅草という江戸の2大商業地に囲まれていたこと、上野寛永寺、浅草寺など有数の寺町をひかえ仏具、銀器の飾り職人がたくさん集まっていたのだ。

明治になってその技術は時計、眼鏡、宝石の加工技術に生かされることになる。当時は単独で宝石を扱うほど流通しておらず時計卸商がサイドビジネスとして扱っていたが、宝飾品は終戦後、流通量が格段に増える。困窮した家から売りに出され、米軍兵士がアクセサリーなどを青空マーケットに出し、それらがどっとアメ横周辺に集まった。やがて卸商によって地方の小売店相手の交換市が盛んに開かれるようになり、1955（昭和30）年には有力業者12社が集まって問屋街をつくることになった。御徒町は上野にも近く、戦災で焼けて空き地も多かったのだ。

□

高度成長とともに日本でも本格的なブームが訪れ、宝飾品を扱うあらゆる業者が集まるようになった。最盛期には全国で流通する宝石の3分の2が御徒町を経由するといわれたほど。1987（昭和62）年には卸問屋組合「ジュエリータウンおかちまち」（JT O）もでき、台東区の地場産業として認定された。

創立メンバーで老舗の「タカラ貴宝」の

増井雄二社長をたずねた。

「日本にはいまジュエリータウンといわれる場所は3カ所あります。水晶の産地だった山梨。真珠の神戸。そしてここ。御徒町の特徴は集散地であること。89（平成元）年にぜいたく品に課せられていた物品税が廃止され、ジュエリー業界は異業種参入が相次いで流通も変化しましたが、今でも日本一のジュエリータウンであることに変わりはないでしょう」

小さな店構えだが、増井社長はコロンビアのエメラルド輸出会社で修行し、小売りも手がけるなど積極経営。御徒町で小売りを手がけるのは1割程度だ。日本女性がまだまだブランド品に弱いのが残念という。

「デザイン料というにはあまりに高い。もっともっと宝石について知ってほしいですね」

宝石をたくさん見せてもらった。ダイヤはカット、カラット、カラー、クラリティ（透明度）の4Cではっきりと値段が決まる。ほら、と1級品と2級品を並べてもらった。ほんと。輝きがまったく違う。ルーペで裏をのぞくとカットの具合が一目瞭然。

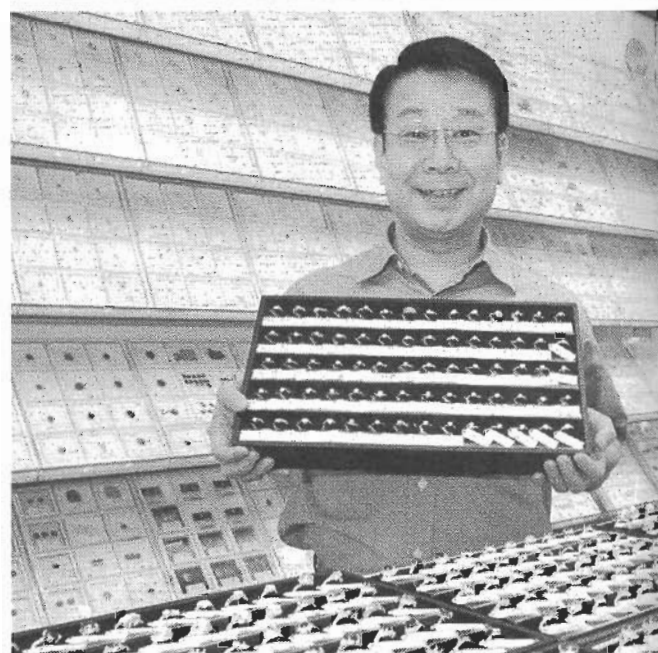
「40歳以上の女性が自分で買うダイヤはみな1割以上。先日もトレーダーの方がほんと買っていかれました。上手なお買い物だと思いますよ」

ち、ちなみにお値段は？ 「120万円。いかがですか」

財布のひもをぎゅーっと引き締めた。

（編集委員）

月～金曜日に掲載



ジュエリータウンおかちまち④。「じっくり」と語るタカラ貴宝社長、増井雄二さん⑤